



日本員林学会代表 <東海金> 掛川掌瑛

風水の起源、また「風水」という言葉の語源については、古来より、郭璞の定義など、諸説ありますが、張明澄先生においては、『周易』の「水風井卦」を「風水」の語源とします。(『周易の真実』張明澄口述・掛川掌瑛編著 1998年、2008年にファイブ・アーツ社より改訂版を出版)

「易」の知識が乏しい人は、文字の順序が逆ではないかと思うかも知れませんが、易卦は、下から順に「初爻」「二爻」「三爻」と立卦するもので、先に「風」(内卦)があつて、後に「水」(外卦)というのが本来の順序です。つまり、「風」の上に「水」が乗っているから、そのまま上から見て「水風井」と読むようになったものです。『周易』には「易卦」の記号と卦名が書いてあるだけで、「水風井」という読み方が書いてあるわけではありませんから、かつては「風水井」と読んでいた時代があつたという可能性も否定はできません。「井」とは、現代と同じく井戸のことであり、空気と水が良い井戸を掘る場所、つまりは人が住むための場所を決めるための技術が「風水」だったと考えられます。また、風水の理論構成は、「巒頭」と「理気」、または方法論の別を問わず、必ず「易卦理論」が基礎にあり、風水という言葉の起源もまた『周易』にあることは何の不思議も無く、全く当然と言えます。

「気乗風則散 界水則止 古人聚之使不散 行之使有止 故謂之風水」(気は風に乗じて則ち散り、水に界されて則ち止まる。古人は之れを聚めて散らせ使めず、これを行いて止まり有らする。故に之を風水と謂う)という、郭璞に依るとされる風水の定義は、明らかに間違つたものです。

まず、「気は風に乗じて散る」と言いますが、それなら山の上から稜線に沿って降りてくるはずの「気」は、無風の日以外は風に吹かれて散ってしまい、平地には届かないのでしょうか。また、「水に界されて止まる」と言いますが、「気」は、稜線伝いに降りる他、水に運ばれ流れて行くものであり、水に遇って止まることはありません。

このようなことは、風水師であれば誰でも知っていることであり、風水の「巒頭」に関する実践的な知識が少しでもあれば、つまり実際に風水を見ることが出来る人であれば、間違えようがありません。

おそらく郭璞とされる『葬書』の作者は、風水師ではなかったでしょうし、実際の風水知識はほとんど無かったのでしょう。つまり現代の学者たちと同様、風水に関わる文献を多く読んだり、風水の周辺に
いるだけで、風水師の世界には立ち入ることができなかったのでしょう。

もともと風水は、人が住むのに適した場所を探す技術であったことは、上記の通りです。つまり、よく
言われる「陽基」「陽宅」「陰宅」という分類では、「陽基」に当たるのが本来の風水でした。しかし、現代
に至るまで、中国人にとって風水とは「陰宅」つまり墓相やお墓そのもののイメージが定着しています。
このイメージを決定的にしたのが、郭璞の作とされる『葬書』であることは間違いありません。

風水に関する典籍には、『葬書』よりも古い『狐首經』など、もっと多くの書物があり、風水の定義も
『葬書』と同じではありません。『青囊經』『錦囊經(葬書)』などは、風水の最古の部類に属する古典籍と
して知られていますが、『黒囊經』『白囊經』『黄囊經』『紫囊經』などの発展形態まで 研究している学者
もいないようです。これは学者の仕事としても褒められたものではありません。

昔から『葬書』の定義ばかりが、正しい風水の定義であるかのように言われ、現代の学者もそれをその
まま踏襲する人が多く、風水師と自称、あるいは他称される人々からも、疑問を呈する人が現れません
でした。どうして累代の風水師たちは、『葬書』の間違いを知っていても指摘しなかったのでしょう。しか
し、風水師も商売ですから、いちいち権威に逆らうよりは、有難く権威を利用して貰ったほうが得策だ
ったのでしょう。



風水地理五訣

「地理」という言葉は、風水の別名として使われますが、もともと風水とは、土地をその起伏や水の流れ
方などによって「気」の流れを読み、「竜・穴・砂・水」という原理によって格付けし、住居地や墓地などと
して、人間の用に供する為の技術であり、地相を見るための理論という意味で「地理」という言葉を使い
ます。もちろん、西洋科学の地理学とは関係ありません。

「地理五訣」の内訳は「竜・穴・砂・水」(巒頭) に「向」(理気)を加えた五項目であり、風水の根本であ
り、風水の全てとも言えるものです。

- 1、 「竜」とは、土地の起伏やうねり、山脈や尾根筋などの形状を神獣である竜に例えたものです。「竜管貴賤」といわれるように、「竜」は「貴賤」を司るものとされます。はっきりとした起伏があり、今にも動き出しそうに見える、生き生きとした「竜」を「貴竜」といいます。このような地形には、多くの「気」が集まり、住む人の身分や地位を高めます。東京で言えば信濃町あたりの地形を思い浮かべていただければ解りやすいでしょう。逆に起伏が全くない平坦な土地は「賤竜」といい、「気」が集まることなく、住む人の身分地位を低下させるようになります。東京で言えば、下町方面であり、山の手線沿線などで、山の手と下町がくっきりと境界が見えるところがあり、「竜」の良いところと悪いところ、つまり「貴竜」の土地と「賤竜」の土地を見分けることができます。黒澤明監督の映画に「天国と地獄」というのがありますが、あの丘の上の豪邸と、丘の下の平地との格差なども、分かりやすい場面と言えるでしょう。なお、陽宅の場合、「貴竜」に生まれ育つことによって次第に「貴」という要素が身につく、次に生まれる子孫たちは「貴」の命式を持って生まれてくるようになります。陰宅(墓相)の場合は、納骨された人の、子、孫、曾孫までに影響があり「貴」という要素を受け継いでゆくようになります。

- 2、 「穴」とは、「竜」のなかの位置のことであり、「竜」に囲まれるか、「竜」の頭部と見なされるような先端付近で、特に多くの「気」が集まることを「竜穴」と称し、非常に尊ばれるものです。また「穴管吉凶」と言い、「穴」の形状が「吉穴」(「的穴」ともいう)なら、住む人を災難から守ってくれるし、形状が「凶穴」(「歪穴」ともいう)なら、住む人はいつも災難に晒されるようになります。また「穴」には「吉凶」以外にあらゆる象意を見る方法があり、「竜」と「穴」の組み合わせによる「格局」を知れば、「巒頭」の見方の過半を知ることになります。何故、「貴賤」と「吉凶」を掌る「竜」と「穴」を知ること、それほど多くの事象を看ることが可能になるのかと言えば、「貴」とは言っても、いつも災難や被害に晒されている人には、立身出世は望めるものではなく、「賤」では勿論身分地位の上昇はあり得ません。つまり「貴」であるためには、同時に「吉」でなくてはならず、そのような条件を叶えた人だけが「貴」を享受することができます。

- 3、 「砂」とは、「穴」の周囲の空気や、周囲にある土砂、周囲の丘や建物などの固形物、それらの総称を言います。「砂管寿夭」というように、「穴」の周囲の環境による、健康と長寿への影響を見るものです。澄んだきれいな空気や、雨の日に泥濘になったりせず、日が照っても砂塵が舞い上がったりしない土質、また「穴」にある、家宅や墓碑などに対して、適度な高さの丘や、建造物などを「寿砂」といい、住む人を健康や長寿に導きます。逆に、煤煙などに汚染された

空気や、いつも泥濘になったり、砂塵が上がるような土地や、高すぎる丘や崖、建物、などを「天砂」といい、住む人を不健康と短命に導くものです。「貴竜」と「的穴」によって「貴」が約束された場合でも、「天砂」に住めば健康を害し、短命に終わりますから、結局「貴」を享受することができません。

- 4、 「水」とは、「水流」のことであり、「穴」の周囲の河川や水路、道路など、水や車、人間などの通り道全般を言います。「水管富貧」と言うように、「水」は、金持ちか貧乏かを決定する要素とされます。「穴」の周りを取り巻いて流れるような「水」を「抱水」といい、そこに住む人は、いつも予定した以上の金銭が入り、予定以上の出費をすることがないので、次第に金持ちになるものです。逆に「穴」のほうに背を向けて流れる「水」を「背水」といい、そこに住む人は、いつも予定以上の金銭が入ることがなく、必ず予定以上の出費をするので、次第に貧乏になってゆきます。「貴」になるための要素は「貴」「吉」「寿」がそろうことですが、「富」になるために「吉」と「寿」は必要としても、「貴」である必要は必ずしもありません。逆に、「貴」になるための要素として「富」がどうしても必要とは言えません。

- 5、 「向」とは、「立向」のことで、「門向」「屋向」「碑向」という、大門、建物、墓碑の表側が向く方位を羅盤によって測定し、「易卦」と「干支」の理論によって何らかの盤や課式を作り、それによって、建物やお墓の良し悪しを判断するものです。この時、「立向」の方位は、必ず「坐山」の方位になっていなければなりません。つまり建物や墓碑の背面側の方位(坐山)から見て逆方向になっている必要があり、表面だけを見て「立向」を決めることはできません。「向管成敗」というように、「向」が良ければ、住む人は成功することができ、「向」が悪ければ、住む人は失敗することになります。ただし、「向」のなかにも「貴賤」「吉凶」「寿夭」「富貧」などの事柄を司る要素があり、「竜・穴・砂・水」との兼ね合いによっては全般に作用を及ぼすことがあります。逆に「竜・穴・砂・水」の作用が決定的な場合に、「向」でそれを覆すことはできません。

「地理五訣」のうち「竜・穴・砂・水」は「巒頭」ともいわれ、可視的な形状を持つものか、または五官で感知しうる要素です。また、「向」は、方位に付された干支や易卦などの記号の組み合わせによって類型化された要素によって、その良し悪しを判断するものであり、五官で感知し得るものではありません。このような理論による要素を「理気」といいます。

[張明澄記念館© Copyright Five Arts Co.,Ltd. All Rights Reserved.](#)

「巒頭」と言えば「竜・穴・砂・水」と、ほぼ同義語として使われますが、建物の形状や間取り、家具などの配置、お墓で言えば墓石の形状などまた可視的な要素、つまり「巒頭」であり、これらを「本家巒頭」といいます。それに対して「竜・穴・砂・水」は、環境であり、外的な要因ですから「外家巒頭」と称して区別します。



風水六大課

明澄透派の風水は「六大課」という「五術」理論体系によって成り立っています。

「六大課」とは、「三式」と「三典」の術数を合わせた六種類の「五術」体系であり、「三式」の「太乙神数」、「奇門遁甲」、「六壬神課」、「三典」の「河洛易数」、「星平会海」、「宿曜演禽」、という六大「五術」体系をいいます。また「五術」とは「命・ト・相・医・山」という五つの機能を分類したものであり、風水は、人相、名相、印相などと同じく「相」に分類され、六大課すべてにそれぞれの風水理論が備わっています。

- 太乙風水 三式の「天式」にあたり、「天時を得る」つまりチャンスを探める方法です。
- 奇門風水 三式の「地式」にあたり、「地利を得る」つまり所与条件を有利に導く方法です。
- 六壬風水 三式の「人式」にあたり、「人和を得る」つまり対人関係を有利に導く方法です。
- 河洛風水 方位と形象を八卦に比定して易卦を得るという特色を持ち、周囲のすべてを立卦して吉凶と象意を得られます。
- 星平風水 子平と七政を組合せ、間取りと設備の方位から、その象意を詳しく見る事ができる方法です。
- 演禽風水 宿曜二十八宿の方位角度により、坐山立向の吉凶象意が豊かな方法です。

各々の「五術」体系の違いは、もっぱら「理気」に関するものであり、風水地理五訣の「向」に当たるものです。風水ではどの方法でも「巒頭」つまり「竜・穴・砂・水」の見方は殆んど同じであり、特に「六大課」では、使う記号が異なるだけで、内容はどの方法でも全く同じとすることができます。なかでも、「奇門遁甲」の「巒頭」の見方は、記号類型として非常によく整理されており、張明澄先生によれば、「奇門遁甲」の方位の理論を風水に当て嵌めたのではなく、風水の「巒頭」から「奇門遁甲」が生まれた、と言う見方を取っておられます。

そのため、「星平会海」などのように、「理気」については独自の理論を使うものでも、「巒頭」については、「奇門遁甲」の理論をそのまま使うものもあります。



奇門風水による巒頭の見方

「奇門風水」について、特殊であるとか、主流派ではないとか、なかには異端扱いする人までいるようですが、もちろん正しい考え方とはいえません。

例えば、「玄空飛星派」の風水は、蔣大鴻(1616年－1714年)が大成者とされますが、蔣大鴻の『地理辨正』の中には、『青囊經』、『青囊序』、『青囊奧語』、『天玉經』、『都天寶照經』の五書が入っており、その注釈本の中で『地理辨正折義』には、蔣大鴻の高名な弟子の姜堯章による注釈が入っています。玄空学の祖とされる蔣大鴻は、如何なる風水理論を持っていたのでしょうか。

『都天寶照經』中篇卷四

蔣大鴻 天有三奇地六儀，天有九星地九宮，十二地支天干十，幹屬陽兮支屬陰，
蔣大鴻 時師專論這般訣，誤盡閻浮世上人。陰陽動靜如明得，配合生生妙處尋。
姜堯章 蔣氏曰。前節贊嘆已足。終篇又此又引**奇門**以比論者。
沙午峰 首句言**奇門**。次句言元運。
姜堯章 蓋**奇門**主地；從洛書來，與地理大卦，同出一原，

つまり、蔣大鴻の「風水」は「奇門遁甲」をベースにしており、三奇六儀の天地と、九星・九宮を使うと言っています。つまり、「奇門遁甲」は、異端どころか、むしろ風水の主流であり、「玄空飛星」とは、「奇門遁甲」の一部を使って発展させたものと言えます。(山道帰一「[レイモンド・ロー風水体系](#)」参照)。日本では「本来の標準的な中国の奇門遁甲」では「九宮」は使わない、と主張した人がいるそうですが、『地理辨正折義』は読んでいなかったものと見えます。

さて、「奇門風水」が「風水」の本流だったことは十分に理解できたことかと思えます。それにも関わらず、何故本来主流の「奇門風水」が少数派になったかと言えば、それだけ「奇門遁甲」が極秘とされ、容易には人の目に触れることがなかったことを証明しているともいえるでしょう。

○五星図と方位の見方

まず、最初に見分けなければいけないのは、「単峰」か「多峰」か「無峰」かということです。

「多峰」なら自動的に「水形」と決まりますし、「無峰」なら「土形」になるはずですが。

「単峰」なら、「金形」「木形」「火形」のうちどれかになる可能性があります。

五星図



左の図のように、「単峰」で頂上が丸く見える山の形を「金形」と言います。

また、「単峰」で頂上が尖った形をしていれば「火形」に当たります。



「単峰」で頂上が「火形」ほど尖らず、やや丸みがあるが「金形」ほど丸くなく「火形」と「金形」の中間的な、お結び型のような山の形を「木形」と言います。



最初はなかなか見分けがつかないものですが、慣れるとコツが分かってきます。

例えば、東京や横浜から見る富士山は、「土形」ですが、甲府や静岡から見る富士山は「水形」と見なければなりません。



「五行」が決まったら、今度は陰陽を決めなければいけません。

まず「穴」から「太祖山」の方を見て「羅盤」の糸が、「穴」の中心と太祖山の頂上を結ぶ線に重なるように向けます。次にそのまま「羅盤」の枠を動かさずに円盤だけを回し、「天地」の中で、指南針が赤い線に重なり、且つ、指南針のお尻と赤い二つの点が重なるように調整します。



次に「羅盤」の糸で「穴」の側の方位を読み取ります。

「穴」の方位が「先天盤」の「乾兌離震」になっていれば、この「竜」は「陽竜」と見ることができます。

「穴」の方位が「先天盤」の「巽坎艮坤」になっていれば、この「竜」は「陰竜」と見ることができます。

「羅盤」の「先天方位」は、分かりやすく「易卦」で表示されています。

すると、次のように「竜」の「十干」が決まります。

「太祖山」が「木形」で「陽竜」なら、この「竜」は、「甲」の「竜」と決まります。

「太祖山」が「木形」で「陰竜」なら、この「竜」は、「乙」の「竜」と決まります。

「太祖山」が「火形」で「陽竜」なら、この「竜」は、「丙」の「竜」と決まります。

「太祖山」が「火形」で「陰竜」なら、この「竜」は、「丁」の「竜」と決まります。

「太祖山」が「土形」で「陽竜」なら、この「竜」は、「戊」の「竜」と決まります。

「太祖山」が「土形」で「陰竜」なら、この「竜」は、「己」の「竜」と決まります。

「太祖山」が「金形」で「陽竜」なら、この「竜」は、「庚」の「竜」と決まります。

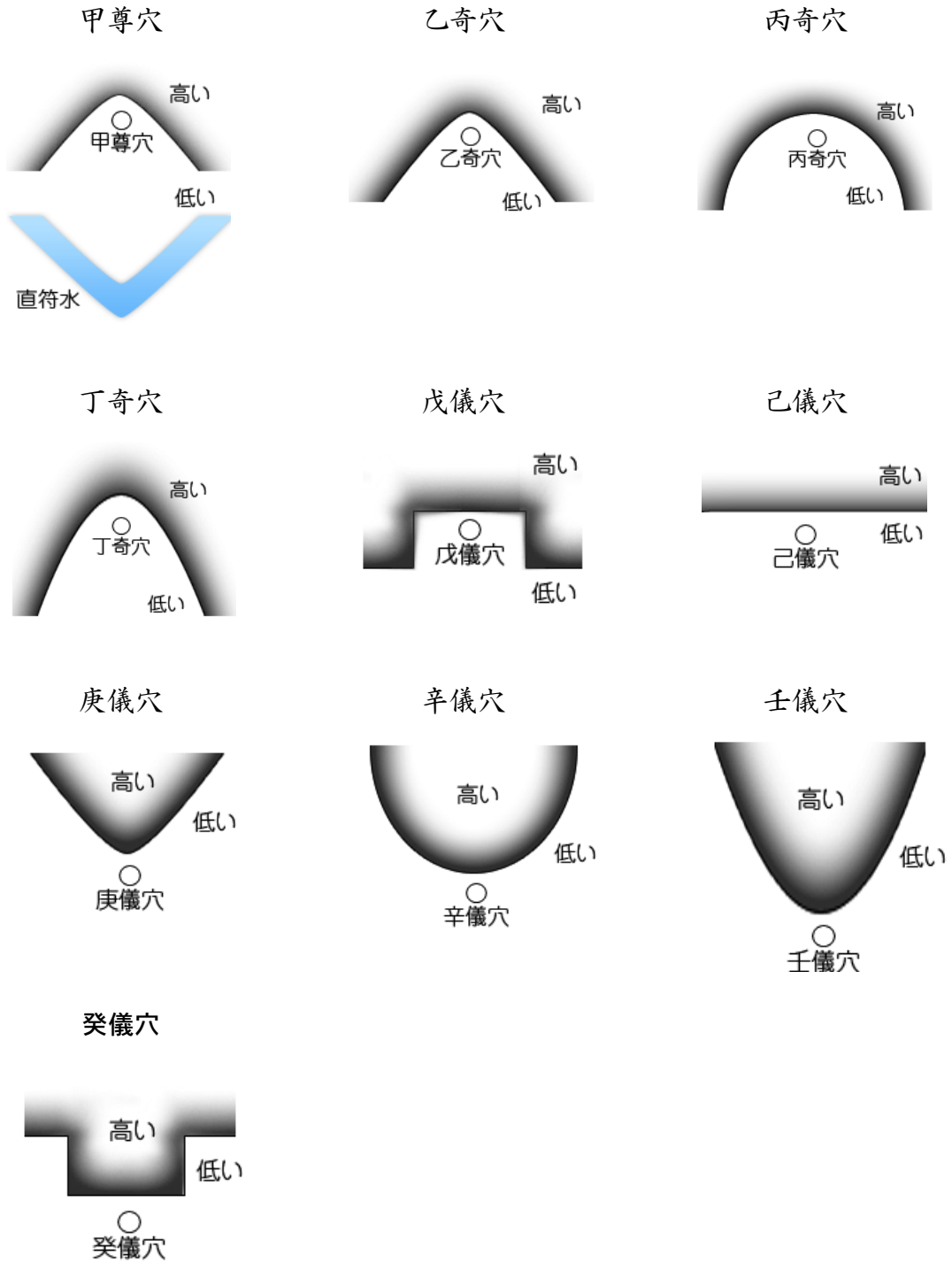
「太祖山」が「金形」で「陰竜」なら、この「竜」は、「辛」の「竜」と決まります。

「太祖山」が「水形」で「陽竜」なら、この「竜」は、「壬」の「竜」と決まります。

「太祖山」が「水形」で「陰竜」なら、この「竜」は、「癸」の「竜」と決まります。

○ 穴の見方

「穴」も「竜」と同じく、その形状によって「十干」を当て嵌めます。ただし、方位とは関係なく、十種類の形をそのまま十干に読み換えます。



○砂の見方

「砂」の見方は、まず周囲の空気や土質を見ますが、空気に関しては田舎がよくて、都会が悪いのは仕方ありません。しかし、土質については、塵埃がたたず、泥濘にもならないという点で、都会のようにほとんどの地面が舗装された環境のほうが、良い「砂」と言えます。周囲の固形物については、その大きさが適度であれば「寿砂」、大きすぎるものや小さすぎるものは「夭砂」とします。また、「穴」との位置関係によって「八門」を宛てて判断します。



○水の見方

「穴」の周囲を流れる川や道路を、その形状により「八神」を当て嵌めて「水」の良し悪しを判断します。

- *「穴」に対し、直角に囲んで流れる「水」を「直符水」といい、權威に絡んで金銭が入ります。
- *「穴」に対し、くねくねと蛇行して流れる「水」を「騰蛇水」といい、争いやトラブルによって金銭を失います。
- *「穴」に対し、半円状に囲んで流れる「水」を「太陰水」といい、治療、信仰、宗教などに絡んで金銭が入ります。
- *「穴」に対し、凸状に背いて流れる「水」を「勾陳水」といい、騙されたり詐欺にあて金銭を失い、チャンスをいつも逃します。
- *「穴」に対し、二つの流れが合流して囲むように流れる「水」を「六合水」といい、他人と和合し、協力して金銭を得られます。
- *「穴」に対し、半円状にて背いて流れる「水」を「朱雀水」といい、贅沢や虚栄のために金銭を失います。
- *「穴」に対し、背きも囲みもせず、まっすぐに流れる「水」を「九地水」といい、地味ですが安定した収入があります。

[張明澄記念館© Copyright Five Arts Co.,Ltd. All Rights Reserved.](#)

*「穴」に対し、凹状に囲んで流れる「水」を「九天水」といい、目上や権威の助力により、大きな金銭が次々に入ってくるようになります。

○ 格局の見方

奇門風水における「巒頭」の「格局」は、「穴」の「十干」を「天盤」、「竜」の「十干」を「地盤」、「砂」を「八門」、「水」を「八神」とし、その組み合わせにより「奇門四十格」を出して判断します。

例えば、東京から見た富士山は「土形」で、東京は富士山から見て、「先天盤」の「離」方位ですから「陽竜」に当たり、「十干」に直すと「戊」ということになります。つまり東京の「竜」は「戊儀竜」ということになります。

次に、東京の「穴」を考えますと、富士山から東京に伸びる「竜」は、高尾山付近で南北に別れ、狭山丘陵と多摩丘陵が扇形に開いて東京を囲んでいます。すると、東京の「穴」は、「乙奇穴」と見ることができます。ところが、東京湾の対岸の形状が「直符水」の形になっていることから、東京の「穴」は「甲尊穴」であることが分かります。すると「天盤」が「甲尊」、「地盤」が「戊儀」という「天地盤」が出来上がります。しかし、奇門遁甲には、「天地」が「甲戊」という組み合わせの格局はありませんから、東京全体の「風水」では「巒頭」の格局は成立しないこととなります。ところが、東京のなかでも「丙奇穴」になっている場所はいくらでもあり、もし、その場所から富士山を望むことができれば、その場所の「天地盤」は「丙戊」ということとなります。奇門遁甲の天地盤で「丙戊」の組み合わせは「月奇得使格」に当たり、財運が非常によく、特に財源に恵まれるという象意があります。もし、その「穴」の左後方に適当な大きさの建物などがあれば「生門砂」に当たり、「天遁」の「格局」を構成します。「天遁」と「月奇得使」では、象意はほとんど同じですが、そのスケールは大きく異なり、ずっと大きな財源を掴むようになります。さらに、「水」が「九天水」になっていると、「神遁」を構成し、非常に小さな資本で莫大な利益を上げるようになります。東京の中央区などの都心部分には「九天水」の河川がありますから、特に官に絡んだ事業で利益があります。ただ、東京に見られるような「甲尊穴」は「乙奇穴」に「直符水」を加えたもので、成立条件が難しく、「格局」に匹敵する作用があります。元禄時代に、江戸が世界の首都のなかでもトップクラスの人口と賑わいを見せたのも、富士山から秩父山系、高尾山などを経て、赤坂、四谷、信濃町から日比谷あたりの起伏に連なる「貴竜」に加え、何より「甲尊穴」の効果が大きかったものと考えられます。

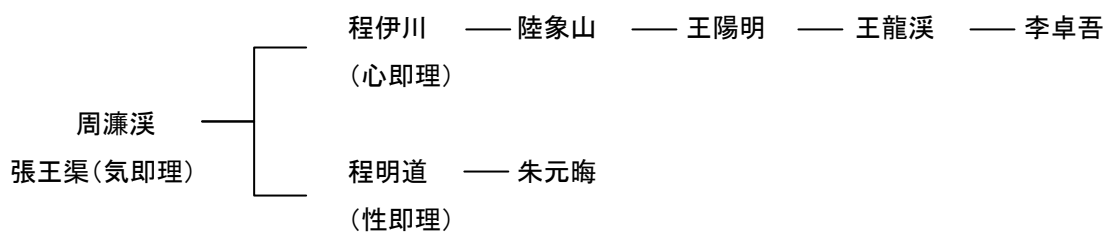
「奇門風水」は、「奇門遁甲」の元となった理論であり、風水、方位、占ト、命理、姓名、印相を問わず「奇門遁甲」を使うときは、すべて「奇門四十格」を考慮しなければなりません。



宋代から明代に跨って、儒易の系譜は、黄渠学、朱子学、陽明学へと連なる「理学」という学問体系を形成します。まず、北宋時代に入ると、易卦を数理的に解釈する、「象数易」というものが誕生し、「円図・方図」を作ったとされる陳希夷に始まり、穆修、李挺之、そして『皇極經世』を編んだ邵康節などに連なります。

北宋	象数家 陳希夷(搏) 方図・円図 穆伯長(修) 李之才(挺之) 邵康節(雍) 堯夫1011~1077
	經典儒 周濂溪(惇頤)1017~1077 1、太極図説 2、後天優勢 3、天性乃静 4、以学為志 張王渠(載) 1020~1077 氣即理 程明道(顥) 1032~1085 性即理 程伊川(頤) 1033~1107 心即理
南宋	朱元晦(熹) 1130~1200 陸象山(九淵)1139~1192
明	王陽明(守仁)1492~1528 心即理 王龍溪(畿) 1498~1538 李卓吾(贛) 1527~1602 厚黒学

理学の系統図



理論

黄渠学	記述 規範 認識	氣即理—唯氣一元論 一視同仁 唯物論(有)
朱子学	記述 規範 認識	性即理 格物致知(而後行) 客観的唯心論(空)
陽明学	記述 規範 認識	心=氣=理 行以求知 知行合一 主観的唯心論(唯識)

結論—理学儒の目標

- 1、正統主義の確立
- 2、政徳理教の統合
- 3、思弁探求の実践

「象数易」の「円図・方図」は、現代に続く風水の系譜のなかでは主流となっている「元合派」、つまり「三元派」や「三合派」と呼ばれるグループの理論的な拠り所となっており、「元合派」の「理氣」は、「円図・方図」の六十四卦なしには、全く成り立ちません。つまり「元合派」の成立は宋の「象数易」以後であることは明らかと言えます。

このことは、「五術」のなかでも成立年代が古いとされる「三式」、即ち「太乙神数」、「奇門遁甲」、「六壬神課」などは、「巒頭」はもちろん「理氣」においても「円図・方図」を根拠とはしないことから、宋の「象数易」以前からの風水理論であることが窺い知れます。

また「元合派」には「五術」と言えるような機能も揃っていませんから、「五術六大課」の門派である「明澄透派」とは、人脈的にも全く別の系列であったと考えることができます。

宋の「理学」以前は、風水を観察する者にとって、「氣」を読むこと、つまり経験則だけが頼りであり、「三式」などの理論も、もっぱら「記号類型」という経験則であり、「理」と言えるような根拠はありませんでした。

「理学」でいう「理」とは、「論理」というよりは「倫理」であり、「氣」という、経験則による記述と「理」という規範の間で、黄渠学の「氣即理」、朱子学の「性即理」、陽明学の「心即理」などの立場が生まれました。

現代でも、「風水」「占い」「超能力」などの信奉者が「非科学的」などといって軽蔑されることに耐えられず、「疑似科学」と言われるような分野に根拠を見出すように、当時の風水師たちが「理気」という言葉に惹かれたのも無理からぬことでしょう。

風水には「巒頭派」と呼ばれる系列と「理気派」と呼ばれる系列とがあり、「巒頭派」によれば、「巒頭」の作用は80%、「理気」の作用は20%に過ぎないとします。「理気派」によっても、「巒頭」の作用は60%、「理気」の作用は40%としており、いずれにしる、「巒頭」が優先されることは間違いありません。

時間や方位など、あらゆる物事に「易卦」や「干支」という「記号」をつけて「分類」した上で、共通するものから規則性を見出し、次に来るものを予知する、という中国式「記号類型学」の手法は、「格物致知」という、二千五百年來中国の学問を支え続けた理念に合致するものでした。

西洋科学には、時間に記号をつけるという発想はないし、今までに、百年もかけて実験してみるような科学者もいませんから、「記号類型学」に関する限りは、否定も肯定もできないし、「非科学」とは言えても「反科学」とは言えないはずです。つまり「風水」のなかでも「三式」など「五術」に属するものは、「記号類型」に依拠する経験則であり、科学から否定されることはありません。

「元合派」は風水専門の流派であり「五術門派」ではありません。明澄透派は「五術六大課」を扱う門派ですから、「三元派」や「三合派」の「風水」を扱わないのは当然ですが、そこには「記号類型」による経験則である「気」という範疇に収まりきれない「理」という観念の問題も存在するのです。